

聖書：第二サムエル記 17 章 1～14 節

説教：神の不思議な助け

1 フシャイ

1) ダビデの忠実な友

今日からまたしばらく第二サムエル記を見て参ります。

ダビデの息子であるアブシャロムは、自分こそイスラエルの王であると名乗り、兵を率いて宮殿があるエルサレムを目指します。これを聞いた父ダビデは、大急ぎでエルサレムを脱出するのですが、その途中でダビデの家臣たちは次々とアブシャロムに寝返っていきます。

その中のひとりが、今日登場するアヒトフェルです。ダビデの弱点を知り尽くした人物が敵の側に寝返ってしまいます。最も恐れていたことが起きてしまいました。ダビデは泣きながらオリーブ山の坂を登ります。これはもう駄目かもしれないと絶望しかけた瞬間でした。そこへ思いがけなくダビデの友であったフシャイが現れます。人が次々と裏切っていくときでさえ、その友を捨てようとしないうしなフシャイの信仰を知って、ダビデは次のような使命を託しました。「あなたはエルサレムに戻ってアブシャロムのしもべとなり、アヒトフェルの助言を打ちこわさない。」

2) ダビデに仕え、アブシャロムのしもべとなる

これは大変な命令です。ダビデに仕えながら、もう一方では父ダビデを殺そうとしているアブシャロムに仕えなさいと言うのです。そんなことができるのでしょうか。アブシャ

ロムも、フシャイがダビデの友であることはよく知っています。当然のことですが、ダビデのスパイではないかと疑います。フシャイはアブシャロムにはつきりと「あなたにお仕えます」と言うのですが、アブシャロムがまともに信用するとは思えません。フシャイのことが本当かどうか、そのことを試す機会を必ずうかがってきます。それが今日の場面です。

2 アブシャロムの前で

1) アヒトフェルの提案

アブシャロムはいまエルサレムに入城を果たしました。イスラエルの王となるためには、あとはダビデの首を取るだけです。どうやってダビデを殺すか。その作戦を練るために、アブシャロムはアヒトフェルを呼び出し、彼の意見を聞くことにしました。

アヒトフェルは三つのことを強調しています。一つ目。ダビデは疲れて弱っている。二つ目。ダビデを倒すために一万二千人の兵力を集めれば十分である。三つ目。アブシャロムは現場に出る必要はない。作戦の指揮をアヒトフェルがとる。

ひとことでまとめれば、ダビデは弱っているので討ち取ることは難しくないと断言しています。

2) フシャイの提案

この作戦はアブシャロムと他の閣僚にも高く評価されました。これで十分だろうと思えました。ところがここでアブシャロムはア

ルキ人フシャイを作戰會議に呼び出し、フシャイにも意見を述べるように求めます。先ほど触れたように、フシャイの忠誠心を試すための絶好のチャンスだからです。

フシャイにしてみれば自分がどう答えるのかで、死ぬか生きるかが決まります。フシャイはどう答えたのか。

さきほどのアヒトフェルが出した作戰と比べてみましょう。三つのポイントがありました。一つ目。アヒトフェルは、ダビデは疲れて弱っていると言いましたが、フシャイは逆にダビデは子どもを奪われた雌熊のように気が荒くなっているから注意が必要だと言います。

二つ目。アヒトフェルは一万二千人の兵を集めればダビデを倒すには十分だと言いましたが、フシャイはまったくそれでは足りない。全イスラエルの兵力を砂の数のように集めなければならないと言います。

三つ目。アヒトフェルは作戰の指揮を自分が執るのだけで十分である。アブシャロムは出る必要がないと言いました。いっぼうフシャイはアブシャロム自身が戦いに出て行くべきであると言います。

ダビデは追い込まれてはいるけれど侮ってはならない。全勢力を結集して討ち取るべきである。フシャイは強調します。アヒトフェルに比べると非常に慎重な意見です。

3) 神に油注がれた王を殺そうとするアブシャロムの不安

結論は14節です。「アルキ人フシャイのはかりごとは、アヒトフェルのはかりごとよりも良い。」意外なことにフシャイの提案が採用されました。なぜ採用されたのでしょうか。アヒトフェルの作戰のどこかにまずい点が

あったのでしょうか。そうとは思えません。すべてを知り尽くしているアヒトフェルのことです。彼の立てた作戰で十分だったはずですが、それなのになぜフシャイの作戰が選ばれたのか。

そのことはアブシャロムが抱えていた不安と関係しているように思います。彼は父ダビデを憎み、父を殺してイスラエルの王座をねらってきました。そのために時間をかけて人々の心を盗み、民たちがダビデに失望するように仕向け、代わりに自分を支持するように嘘の情報を流し続けてきました。そうして、成功まであともう一步のところまで来ました。

けれども、一つだけ気がかりなことが残っています。というのは、イスラエルの王を決めるのは神なのです。でもアブシャロムは神の指名を受けていない。神からの指名がないままにイスラエルの王になろうとするなら、その者に神の正義があるはずはありません。アブシャロムはそのことに気がついていません。いろいろな口実をつくって正当な世継ぎであるかのように演出してきましたが、どうあがいても嘘は嘘のままです。

力づくで父ダビデを殺し、自分が王になったとしても人々は黙っているだろうか。もしかしてダビデに与していた民たちは反乱を起こすかもしれない。そんな不安がどうしてもぬぐえません。

そう考えると、アヒトフェルは、ダビデさえ殺せば民たちは穏やかになると言うけれど、あまりにも楽観的に聞こえてしまいます。一方のフシャイの作戰は、民たちも、いや町全部さえも徹底的に襲っていくという提案です。アブシャロムが抱えていた不安をみごとに解消してくれそうで見えました。フシャ

イの作戦が選ばれた理由がここににあります。

3 フシャイの信仰を通して働かれる神

1) フシャイはダビデを裏切ったのか

フシャイはアブシャロムの前で厳しい試験に見事合格できました。しかし喜んではいられません。皆さんは、フシャイが語ったことばを読んで疑問に感じたはずです。フシャイはダビデの友です。ダビデに仕えながら同時にアブシャロムにも仕える役割を担っていたはずです。ところがフシャイの作戦はどうか。アヒトフェルが提案した作戦よりももっと徹底的にダビデを殺していく、そんな作戦に読めます。フシャイは自分が殺されるのが怖くなり、ダビデを裏切ったのでしょうか。あるいは、ピンチを切り抜けるために、口から出任せを語っただけなのでしょう。

フシャイはそのような人ではありません。ダビデに仕え、同時にアブシャロムにも仕える。何よりも神の前でひとことも間違ったことは語ってはならない。いのちをかけてもそうしようとする人です。ではフシャイのことばはどういうことなのでしょう。

2) アヒトフェルは「ダビデ」「王」と言う

アヒトフェルのことばと比べるとわかりやすいと思います。

アヒトフェルはなんと言ったか。1節。「私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、彼を襲います。」2節。「私は王だけを殺します。」彼ははっきりと誰を殺すのかを明言しています。イスラエルの王であるダビデを殺す。名指しで殺す相手を示しています。

3) フシャイは「あなたの父上」と言う

では、フシャイはどう語ったか。8節から

10節に「あなたの父上」が三回くり返されています。アヒトフェルと比べてください。フシャイは、「ダビデ」とは言わず、「王」とも語らない。フシャイは意識して、「ダビデ」「王」ということばを避けています。

また12節も見ましょう。「われわれは、彼を見つけしだい、その場で彼を攻め、露が地面に降りるように彼を襲い、彼や、共にいるすべての兵士たちを、ひとりも生かしておかないのです。」

「彼」とは誰のことか。「もちろんダビデのこと」と答えるでしょう。実際にアブシャロムはそのように受け取りました。でもそれだけでしょうか。よく見ると、「彼」とは別にダビデに限る必要はない。別の人を指すと考えることも可能です。

ダビデを裏切らず、ダビデに仕え、そして神の前に忠実な信仰者として歩もうとするとき、ぎりぎりのいのちをかけたことばを語ります。「彼」がダビデではない別の人を指すことも可能なように語っています。ずるいと言うのでしょうか。詭弁だと非難するのでしょうか。外野席に立って、フシャイのことばを非難するのは簡単です。

4) アブシャロムが罪を犯すことのないように

でも一つだけ忘れてならないことがあります。もう一度言いますが、フシャイはダビデに仕えるとともにアブシャロムにも仕えることを命じられた人です。アブシャロムも主人なのです。主人のために最大限の助言をすることがしもべの役割です。

なぜフシャイは「ダビデ」とか「王」と言わず、「父上」と言うのか。なぜ「彼」と言って紛らわしい言い方をするのか。ダビデは神

の油そそぎを受けたイスラエルの王なのです。ダビデはかつて上司であったサウルを殺すチャンスが目の前にあったときも、神に油注がれた方に手を下すことは罪であることを示され、強い誘惑があったのにも関わらず、サウルを殺そうとする部下の手を押しとどめたことがありました。

フシャイが考えていることはこのことです。王であるダビデに対し、アブシャロムが手を下すような作戦をしもべとして提案しては絶対にならない。そんなことをしたならアブシャロムは大きな罪を犯してしまうことになる。だから絶対に「ダビデ」とか「王」という言葉は使いません。そして追いつめていく相手についても「彼」ということばで含みを持たせます。「彼」ということばが神に敵対する者を指すならば、アブシャロムは罪を犯さずに済むからです。フシャイがなぜこのようなことばを語ったのか。フシャイが自分を守ろうとして語ったのではありません。むしろ、アブシャロムを救うためにこのように語っていたことがわかります。神はこのフシャイの信仰を通して働かれていきます。

私たちはアブシャロムと同じです。自分の計画を推し進めるためにあらゆることをしてきたかもしれません。でも、いつも心のどこかに不安を抱えています。自信がありません。どこかにほころびがあることがわかっています。いつかそれが破れてしまうのではないかと不安があります。

いったい何を見て歩いていくのでしょうか。ひたすらに父を憎み、力に頼んで父を殺し、自分が王となることを目指すのでしょうか。それとも。私たちは神のひとり子を十字架で殺し、自分が王となろうとした者だと認め、その罪を告白することでしょうか。神は、

神を殺そうとする者のためにもひとり子を送ってくださり、罪から救われるようにと救いのご計画を立ててくださいました。神の前に自分は偽り者である。そのように告白するとき、神は不思議な助けを与えてくださいます。

そのことに改めて感謝したいと思います。